

書評

広沢正孝 著

成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群

社会に生きる彼らの精神行動特性

中根 晃

高機能広汎性発達障害の行動特性や精神症状の特徴について論及

大分前から成人のメンタルクリニックで大人の発達障害が多くなったという話を耳にするようになった。児童期の発達障害の臨床に従事している精神科医は、心の理論、執行機能などの認知特性の考えを援用して思春期に達した発達障害の病理をとらえ、その延長としての成人期の発達障害の臨床像を想い描こうとしていた。これに対し、成人期になって統合失調症なり人格障害などが疑われて成人中心のクリニックを訪れる発達障害の患者について論及したのが本書である。

子どもは中学生の年齢になると自分自身を意識するようになる。この意識が年齢とともに明確になり、確固とした自己感(sense of self)に達する。正常な知的水準にあり、ある程度の社会生活が可能な高機能広汎性発達障害の人たちは、社会への適応に向けてたゆみなき努力をしており、それは障害というより特殊な発達の道筋(発達のマイノリティ)をたどりながら発達してきたものと著者は述べている。一般の人は対象を物質的存在としてとらえて体系化していく志向性と、それを社会的な環境の中で特化しようとする共感を持って把握しようとする志向性の両者によって、自己と対象との距離が適切に保たれ、体験された対象に自分固有の意味が与えられる。

他方、著者によれば、高機能広汎性発達障害

の人は周囲の事象を体系化し、あるいは分類化することで理解しようとする志向性が特徴的で、物質的存在としてとらえる視点を土台にした世界を展開させながら、社会の枠の中で生きていこうとしている。彼らは社会的な存在として周囲の事象を共感的に把握する志向性を欠いているので、著者はこの種の自己感の発達に乏しい自己を PDD 型自己イメージと名付けている。実際の臨床ではその形と程度は事例によって相当な開きがあるが、体系化と共感という 2 つの動因が互いに影響を与えながら、1 つの局を構成して、社会の中での自己ができていく。診療場面で直面するのは、それぞれが機能不全を来した形としての症状であるとしている。さらに著者は高機能広汎性発達障害の人の職場での行動特性として、人の気持ちを読めない人に見える、場の空気を読めない人のように見える、など 10 項目を挙げ、それが職場の人にとどのような印象を与えるか、それに関連ある精神行動特性、などの注釈を加え、結婚生活を中心に家庭での精神行動特性として、愛情がない、冷たい人に感じられる、1 人で生きている、いっしょにいても虚しい、などを挙げている。加えて、精神科外来での高機能広汎性発達障害の精神症状の特徴を記した章には臨床医の診療に有用な情報が記載されている。

(日本自閉症スペクトラム学会会長)

●B5 192 頁 2010 定価 3,570 円(本体 3,400 円+税) 医学書院